

強さは殺し、弱さは生かす

[聖書]コヘレトの言葉 4章 1～12節

わたしは改めて、太陽の下に行われる虐げのすべてを見た。見よ、虐げられる人の涙を。彼らを慰める者はない。見よ、虐げる者の手にある力を。彼らを慰める者はない。

既に死んだ人を、幸いだと言おう。更に生きて行かなければならない人よりは幸いだ。いや、その両者よりも幸福なのは、生まれて来なかった者だ。太陽の下に起こる悪い業を見ていないのだから。人間が才知を尽くして労苦するのは、仲間に対して競争心を燃やしているからだということも分かった。これまた空しく、風を追うようなことだ。愚か者は手をつかねてその身を食いつぶす。

片手を満たして、憩いを得るのは

両手を満たして、なお労苦するよりも良い。それは風を追うようなことだ。

わたしは改めて 太陽の下に空しいことがあるのを見た。

ひとりの男があった。友も息子も兄弟もない。際限もなく労苦し、彼の目は富に飽くことがない。「自分の魂に快いものを欠いてまで誰のために労苦するのか」と思いもしない。これまた空しく、不幸なことだ。

ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。

更に、ふたりで寝れば暖かいが ひとりでどうして暖まれようか。

ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。三つよりの糸は切れにくい。

[1] 矛盾する心の中で

旧約聖書の「コヘレトの言葉」は、その中に矛盾したことが書かれていて一体どう捉えたら良いのか分からないことがあります。例えば一方で人生の全くの空しさを訴え、厭世的な考えを語るかと思うと、一方では、「人間にとって最も幸福なのは、自分の業によって楽しみを得ることだとわたしは悟った」(3:22)とも語ります。けれども、考えてみると矛盾はしていないのかも知れません。彼はある一つのことを思うと空しくもなるし、また、楽しく生きることが良いことだと思えているのだと思います。彼が何を見ているかと言うと、それは「死」ではないかと思えます。3章の最後の言葉は「死後どうなるのか、誰が見せてくれよう」となっています。その彼の揺れ動いている心は今日の4章にも見られます。2節以下です。「既に死んだ人を、幸いだと言おう。更に生きて行かなければならない人よりは幸いだ。

いや、その両者よりも幸福なのは、生まれて来なかった者だ。太陽の下に起こる悪い業を見ていないのだから。」同じ旧約聖書のヨブのようですね。ヨブは「自分の生まれた日は呪われよ」(ヨブ 3:1 口語訳)とさえ言いました。

このコヘレトの言葉の作者は、4章8節まで、ずっとこの世の無常や儚さのようなものをこれでもかというように語っています。けれども、9節～12節では、全く違う言葉を語り始めます。ここの部分に今日は注目したいと思いました。この後の彼の言葉は、孤独ではないのですね。お読みしますと、

「ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。れれば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。更に、ふたりで寝れば暖かいが ひとりでどうして暖まれようか。ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。三つよりの糸は切れにくい。」となっています。

「何という空しさだろう。すべては空しい」と、ため息をつくようにしていた彼だったのです。しかしその彼は「ひとりより二人が良いのだ」と言い、或いは「三つよりの糸は切れにくい」というように、**他者の存在**が出てきます。そして、その他者と一緒に生きるということの幸いを語ります。「共に苦勞する」とか「倒れた時に起こしてくれる」とか、ここには他者の存在を喜んでいる姿がありますよね。そして実はそれこそが、「空しさからの解放」なのではないでしょうか。「**交わり**」の中で、人は自分らしさを取り戻すということではないでしょうか。

[2] 星野富弘さんの詩「よろこびが集まったよりも」

そこで私は思い出した詩があります。あの詩画集カレンダーで有名なクリスチャンの**星野富弘さん**の詩です。よく知られた詩だと思います。こういう詩です。

よろこびが集まったよりも
悲しみが集まった方が 幸せに近いような気がする

強いものが集まったよりも
弱いものが集まった方が 真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも
ふしあわせが集まった方が 愛に近いような気がする

とてもいい詩だと思います。私は週報にも書いたのですがけれども、**詩編 133 編 1 節**の言葉がこの礼拝堂に掲げられていますけれども、「兄弟が共に座っている。何という恵み、何という喜び」という、その「兄弟」と言うのは、例えば 4:4 で語る

れているような「競争心」が渦巻いているような交わりの兄弟姉妹ではなく、正に、「悲しむ者」の集まり、「弱い者」の集まり、「不幸せな者」の集まりなのだと思います。星野富弘さん自身、本などを読んでみると、彼は頸髄損傷という一生負わねばならないような大怪我をしたのだから「頑張らねば、頑張らねば」という時もあったと正直に書いています。けれどもその葛藤の中でイエス様の招きの声に救いを得たのです。その御声とは「**疲れた者、重荷を負う者はわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう**」(マタイ 11:28)。星野さんは一生の重荷を共に負って下さる方を知ったのです。主イエス・キリストですね。

そして、クリスチャンとは皆そうなのです。クリスチャンとは、たった独りで、“自力”で生きることを断念した人です。他者によって(最大の「他者」は神様であり、イエス様です)助けて頂くことを喜ぶ人です。私の全てを知っていて下さり、隠された罪をも負って下さるイエス様に、変な強がりや競争心を脱ぎ捨てた星野さんの心が、この詩によく現れていると思うのです。

[3] 『特定の人』になって下さったイエス様

クリスチャンの私たちも、この世を生きています。私自身気が付くと、いつの間にか**不自由のない生き方**を望んでいる自分がいます。贅沢はいらないけれども**人並みの生活**を維持したい自分がいます。自分を否定されるよりも、**認めて欲しい自分、高く評価して欲しい自分**がいます。当然といえば当然と言えるのかもしれませんが、しかしそれは、「**強く生きよう**」という思いの裏返しなのかもしれません。その時私たちは忘れがちになってしまうのです。私たちの「**強さ**」という**もの**の背後にあって、見えなくなっている人々をです。いや、もしかしたら私たちの心が、そのような人々を生み出しているとうこともあるのだと思うのです。

このコヘレトの言葉の作者も、4:1でこう言っています。「**見よ、虐げられる人の涙を。彼らを慰める者はない。見よ、虐げる者の手にある力を。彼らを慰める者はない。**」この世界に存在する「**強者がいて弱者がいる**」構図です。これは決して当たり前の構図ではないと思います。私たちの「**罪**」が生み出しているのです。

今月10月は「**里親月間**」だそうです。「**日本子ども支援協会**」というNPOの代表をされている**岩朝しのぶさん**のお話をラジオで聞きました。今日本で45,000人もの子どもたちが、自分の親の許で生活出来ないでいるそうです。色々な理由で親が子供を育てられなくなってしまっている。親の事故や貧困や病気、自殺、或いは刑務所に収監されている、などという理由もありますし、とても多いのが、それこそ**虐げ(虐待)**、また**育児放棄(ネグレクト)**です。このような子どもたちがそのまま放置されると、不安と不満が大きくなり、犯罪に関わってしまうことも

あるのです。岩朝さんは、そのような子どもの社会的支援ネットワーク作りをされています。いわゆる養子縁組もありますけれども、それはとてもハードルが高いので、養子ではなく、誰でも出来る**養育里親制度**を勧めておられます。ホームページがあるのですが、岩朝さんはそこで**マザーテレサの言葉**を紹介しています。「1981年、マザーテレサが初来日した際にこう言いました。『日本人は他国のことよりも、日本の中で貧しい人々への配慮を優先して考えるべきです。愛はまず手近なところから始まります。大切なことは、遠くにある人や、大きなことではなく、目の前にある人に対して、愛を持って接することです』」。そして岩朝さんはこうおっしゃいます。「私は、子どもは出来るだけ家庭的な環境で育てて欲しいと思っています。このような子ども達は「親心」に触れた事はありません。大切な乳児期、幼少期を育てていく時に一番大切なものは物質的なモノではなく、しっかり自分だけを見てくれる『**特定の人とのかかわり**』だと思うのです。」

人間とは、「**関係**」の生き物なのですね。関係の中で傷つくのですけれども、また、関係の中で癒されてもいくのです。私はこの「こども支援協会」の働きに共感しました。そして思いました。岩朝さんがおっしゃった、「一番大切なものは物質的なモノではなく、しっかり自分だけを見てくれる『**特定の人とのかかわり**』だ」と言われる時、私は**イエス様**のことを思いました。**イエス様が、私たち一人ひとりの『特定の人』になって下さるのです。この私という存在をしっかりと見てくれる。見るだけでなく、ご自分の命まで献げて下さり、「あなたを捨てて孤児とはしない」と言ってお下さっている**のです。そこには例外はないのです。あのイエス様を捨ててしまったユダのためにも主は、最期の晩餐の食卓を用意されました。食卓とは「孤食」ではないということですよね。イエス様を中心として、交わりが、仲間が、そこに出来ているのです。「**主の晩餐式**」とはそういうものですよね。イエス様は「**彼らを一つにして下さい**」と祈られましたけれども、私たち**教会の本質**がここに 있습니다。分け与えられたイエス様の体と血汐。これをあなたのものとし、分か合えと。ここにあるのは、**死で終わらない命の約束**、「決してあなたを捨てない」という**神様の親心**です。その親の許で、私たちは一つとされているのですね。

星野さんの詩を思い起こします。「**強いものが集まったよりも弱いものが集まった方が 真実に近いような気がする**」。私たちはこの世で支配するような競争心を十字架のもとに捨てたいと思います。本当に、イエス様に許されたお互いとして、真に弱さをこそ誇る共同体へと導かれて行きたいと思います。祈ります。

神様、今日共にあなたの愛の中で、神の家族として礼拝を捧げられました恵みを感じ感謝致します。あなたは私たちを弱いままで、罪あるままで招いて下さいました。私たちもあなたの愛に学ぶことが出来ますように。主によって。アーメン。